

都市公共政策ワークショップⅠ 議事録

テーマ：「こどもたちとつくる貧困とひとりぼっちのないまち

ー子どもの貧困の現状と官民連携のあり方ー」

講師：特定非営利活動法人 山科醍醐こどものひろば 理事長 村井 琢哉 氏

指導教員：五石 敬路

日時：2016年7月8日（金）

場所：梅田サテライト6階107教室

議事録担当：M1 畑中 久代

<講師の紹介>

- ・政策をつくる専門家というよりは、現場で感じていることや現場でスタッフがやりやすいように意見を出している。
- ・大学や社会人大学院も出て、現在、公益財団で勤務。今、代表をしている NPO 法人は、36年目の団体である。この二つの関わりの中でつながりができ、行政の委員や大学の非常勤講師などもしている。
- ・仕事を別でしながら、団体の活動もしているが、仕事という感覚ではなく、自分の生活の一部という感じである。まちで暮らしている住民として、課題解決型でやっていけばいい思うことに取り組んでいる。

<子どもの貧困と山科醍醐こどものひろば>

- ・最近、新聞などでも「見えにくい貧困」という話が出る。自分が貧困の状態であるのがばれないように、どう振る舞うか。自分が苛められないようにどう振る舞うか。貧困に限らず、いろんなことを見えないようにして大人になっていく子どもが多いのが現実である。それが何かのきっかけで吹き出してしまう。その原因となるのがお金にまつわる貧困問題である割合が大きいということが今の日本で言われている。
- ・ひとり親のこともよく言われる。両親が揃っていて、祖父母世代がそれを支えるというパッケージが、いろんな社会保障を受けるための条件であった。これが、例えば離婚や祖父母と離れて暮らしているということで、パッケージのバランスが崩れると、保障が受けられなくなるという事態になる。子育てをしているという中では、「ひとり親」がクローズアップされてしまう。
- ・そんな中で、山科醍醐こどものひろばは、地域の中で子どもたちが心豊かに育つことをめざして活動をしている。事件が多く、治安が悪いとみんなに思われる中で、みんなでこのまちの中でがんばっていかうと思っている。地域の主婦を中心にボランティアでいろんな活動をしている。基本的には、ボランティアで頑張ってくれる人たちを自分たちが支えているくらいのイメージである。
- ・山科はもともと、京都の中心から山を越えた場所にあり、自分たちのまちを自分たちでつくるという文化はあった。

〈親と子の劇場〉

- ・1980年から、山科醍醐親と子の劇場を続けている。「親子劇場運動」は全国的に広がり、今では形を変えているところもあるし、全滅した地域もある。もともと会員向けに、会員が文化活動を届けようということだった。体験、野外活動を得意とする団体である。非日常を作ることをしてきたが、日常で困っている人が出てきたので、困っている人を応援しようということになった。それを受け止めてくれる地域を作っていこうというのが、今、3つ目の段階の活動になっている。

〈「困った子は、困っている子」〉

- ・活動を続ける中で、「困った子は、困っている子」なのだということが分かってきた。
- ・集団で自分が困っているということを表現できないので、1対1の個別のサポートを作ると家庭の事情が見えてきたり、低所得の問題が見えてくる。そのうち、あるお母さんから「うちの子、ずっと引きこもっていて・・・でも、こどものひろばの活動だけは行くって言う。自分はひとり親なので、遅くまで仕事をしていて、ちゃんと晩御飯を食べているか心配なので、週に1度だけでいいので、晩御飯を一生に食べてほしい」といわれたのが1歩目。そんなところから、「こどもの貧困」ということに深く関わることとなった。
- ・京都市はユースサービス協会が一括で受けて、そこから拠点のあるところはその場で、拠点の無いところは地域と組んで、生活困窮支援事業をしている。
- ・実際、中学生が一人で1~2週間も暮らしているような事例もあり、そんな子たちの応援もしている。その子たちは、普通の子たちが体験している非日常的な体験をすることがないので、そんなことも体験させてあげなければ、夏休みの日記も書けない。
- ・「貧困の中で、文化が不足する」とよく言われる。行政がその部分まで支援するのは難しいため、我々がやっている。子どもたちは、今、困っているが、行政が何か施策を作るのには時間がかかる。時間がかかると子どもたちは諦めてしまう。今困っているものに答えられる仕組みがなければ、子どもの成長、ステージの展開の速さには対応できない。それに対応できるように行政などに訴えてはいるが、今、困っている子どもたちに対しては、すぐに手を打たなければならない。これをできるのは、そこに住んでいる人たちである。
- ・子どもが貧しいわけではなく、生活する環境にお金がないだけ。お金が無くて「困った」状態にあり、先の見通しが立たないのが貧困である。「貧乏」とは意味が違う。
- ・子どもの貧困率は約16%。それに近い数字は就学援助の数。ランキングをいろいろ出されるが、多い少ないではなく、「いる」ということが問題。ある人の例では、周りが豊かだったので、自分が虐待され貧困状態であったが、誰にも言うことができなかったということもある。少ないからこそ、孤立して言えないかもしれない。

〈学校との連携〉

- ・いろんな学校に支援に入るが、入る学校は結構しんどい学校。事務所で不登校児の対応をすることもあるが、不登校児の問い合わせがあるのは、我々を受け入れてくれない貧困が少ない学校である。多い少ないではなく、多様な苦しみ方をしているということを知ってほしい。

- ・貧困の話で、よく教育費の話が出てくる。ひとり親家庭の場合、大学になるとときには児童扶養手当は切れている。一番お金がかかるときには、社会保障が切れるので、この年代の貧困率はぐっと上がる。
- ・経済的に具体的にどんな問題が発生するかというよりも、皆さんが日常、食事をとる、人とコミュニケーションを図る、勉強するなど、家族との会話など、いろいろな場面で不具合が生じる。
- ・肝心なのは衣食住。衣食住が不十分な環境になっている。
- ・学校で生活習慣アンケートをとると、「ちゃんと3食とっている」という回答になるが、その中身が問題で、朝はパン、昼は給食、夜はカップラーメンなど、炭水化物ばかりになっている。
- ・貧困家庭は肥満率が高いという結果が現実的に出ている。アンケートで本当のことを書くと、いろいろ言われるのが嫌でごまかしながら生きている。しかし、学力はごまかしようがなく、最終的に学歴に差が出てくる。

〈貧困家庭の連鎖を断ち切る〉

- ・貧困家庭は連鎖するといわれているが、そのサイクルは20年くらい。今の大学生は30年くらいのサイクルである。生産スピードが速く、文化が劣化していく。だから、早くサイクルを断ち切らなければいけないということを知ってほしい。
- ・貧しさが悪いわけでも不幸なわけでもない。それをバネに頑張っている人もたくさんいる。ただラッキーだったということが言える。このラッキーをいかに必然に変えるか、人を育てることが大切。
- ・貧困への認識をアップグレードするために、常に議論をして、使える施策にしていくことが必要。
- ・ただ生きていけるということだけではなく、普通の子どもがしているような文化的な生活が送れるようにしたい。選ぶかどうかは個々の自由だが、せめて「選べる」という状態を作りたい。
- ・子ども食堂や学習支援は、ただの手段である。大切なのは、それらを通じて何を子どもたちに届けるのか、何を保障してあげるかということ。居場所が無い子どもたちに、せめて地域の中に安心できる環境を作りたいと考えている。
- ・子どもたちに成功体験だけでなく、良い意味での失敗体験もさせてあげたい。失敗しても再チャレンジができるということを知ってほしい。そのために野外活動などいろんな体験活動をするメニューを用意している。
- ・子どもに経験させるためには親とやり取りをする。そのやり取りを支援の機会にしている。保護者会も実施し、ある意味でピアカウンセリングにもなっている。
- ・子どもたちは学校にいる時間が長いので、学校をサポートすることもしかけている。貧困の子どもが他の子と差ができてくるのは中学生くらいからだが、それは、お金がかかるようになるからである。
- ・部活動、携帯、コンビニでの買い物など、差が出てくるが、それをごまかしている子どもたち。ごまかせるうちはいいが、そのうち耐えられなくなる。中学生くらいで出るといいが、大人になってから出る子もいる。
- ・小さいうちに差を埋めてあげられるとよいが、大きくなってからだと差が大きくなっていて、なかなか支援の効果がでない。子どもたちが諦める前に、多くの場合、支援者が諦めてしまっているのが現実。学校現場だけの責任にせず、地域も一体になって支援しなければ、なかなか続かないし効果が出

ない。

〈対処型の支援と対策型の支援〉

- ・日常を埋めなおすという活動なので、特別な場ではなく、マンションの一室や一軒家などを使って活動している。そこで、お風呂に入ったり、洗濯機の使い方を学んだりしている。
- ・活動は大学生と一緒にしている。指導者や友達ではないので、縦関係や横関係ではなく、斜めの関係である。「あんなお兄ちゃんになりたいな」というモデルを見せている。一緒に生活している中で、「こっちの方がいいんじゃないか」とかいうメンター的な役割をする人を周りに増やしている。
- ・今までの話は「絆創膏を貼る」という話である。傷がついているところ、困っているところに「対処する」という話である。
- ・今、政策として増えている子ども食堂や学習支援は、絆創膏の数を増やすこと。数としては全く足りてないので、増やせばいいと思っている。そのような場で、見えにくい貧困に触れてもらう機会が増えればよい。貧困状態から、貧乏に変えていくのが対処型の事業。
- ・一方、収入を増やすのは対策型の事業で、こんな問題があるということの周知や就労支援、賃金交渉、社会保障制度の活用などがある。しかし、今の子どもたちの「あたりまえ」を知っておかなければ、政策にすることはできない。最終的に政策を作ってくるのは、議員であり行政である。その人たちがしっかりと現状を認識し、政策形成していけるようにやり取りをしていきたい。
- ・先日、ある県で県内に子ども食堂を4か所作りたいという話があった。子どもの行動範囲は限られているのに、県内に4か所では行きようがない。そういう現状をまちの人たちと協議をし、進めていかなければ有効な政策にはならない。

〈多様な主体との連携〉

- ・私たちも、支援の場をたくさん作りたいが、全て行政のお金とか寄付金とかで賄うと数が作れないので、ケアができない。地域のいろんな人の「得意」を借りながら、連携して進めている。
- ・中学校の中で民生委員の皆さんなどと勉強会をしている。小学校にはプレイリーダーが行って、遊びを届けている。
- ・京都市は、コミュニティスクールという仕組みを取っていて、土曜や放課後のサポートをしている。その中でも、特に学校から帰った後が心配な子どもたちを、私たちが引き受けている。保護者への説明、担任との調整は学校長がすべてしてくれる。活動は定着してきており、平日、私のところに宿泊して、翌日、直接も学校に登校することもしている。スクールソーシャルワーカーが学校と私たちをつなぎ、できる支援について皆で議論して進めている。
- ・一方で、生活保護世帯の子どもも私のところによくつながってくるが、ケースワーカーとどんな支援がいいか定期的に作戦会議をする。
- ・議論することで、行政だけとか学校だけが責任を負うのではなく、皆で役割分担し協働することができる。

〈今後の課題〉

- ・最近、感じているのは、貧しさに対する支援、就労できる環境にない家庭の支援は難しいということ。中卒で働きに出て、低賃金で働いている子にとって、今の家賃は高すぎる。結果的に、生きてはいけるが、未来は開けていない。
- ・困難の多様さに柔軟に支援できる人が少ないと感じている。そういった人をどう増やしていくかが課題。また、継続性の担保も難しいと感じている。
- ・事業運営のことでいうと、多様な課題に応えるための活動づくりも大切。
- ・最終的には、絆創膏を貼るタイプの支援ではなく、傷がつかないようにする普遍的な支援に変えていかなければならないと考えている。
- ・子どもの貧困の再燃ということが言われ、子どもの支援のゴールはどこかと聞かれることが多いが、再燃のリスクをどう防ぐかということを考えなければいけない。そのためには、社会の構造を変えていくことも必要だが、今、助けてほしいと思っている子どもたちが、ちゃんと「助けて」と言えるような環境をつくりたい。
- ・活動に来なくてもいろんな人とコミュニケーションできるまちなしていきたいと考えている。
- ・「人間浴」という言葉で言っているが、監視の目ではなく、「どうしたのかなあ」というような眼差しでみてほしいと思っている。

<質疑応答>

- ・子どもの貧困は、原因をたどれば親の貧困ではないかと思う。原因はいろいろあると思うが状況を教えてほしい。
 - 親の収入が増えるのを待ってられない。また、親に養育能力が無いことが多い。また、親が鬱になっていることもある。DVを受けているケースも非常に多い。働ける状態にない親や働いても収入が伸びない。母子家庭で年収の平均が181万円。非正規雇用である。お母さんたちもすごく頑張っているの、しっかり話を聴いてほぐしてあげることもしている。
- ・どれくらい貧困で困っている子どもがいるかをどのようにつかむのか。
 - 基本的には、学校の就学援助。先生によると、就学援助と成績もはっきりと関係が見えている。それと日常のコミュニケーションで推計できる。学校によって、言ってくれるところとなかなか言わないところがある。また、貧困家庭の子は虫歯が多い。美容院でもつかんでいるんじゃないか。
- ・親と切り離れた方がいいのではないかと思われるケースはないのか。
 - 一番大切なのは、子どもの命を守るようにすること。どうしても子どもが家族と一緒にいたいというケースもあるので、一つひとつ事例と向き合いながら対処する。「絆」というものにはあまり執着していない。
- ・貧困の連鎖を断ち切れたような事例があれば紹介してほしい。
 - 子どもの貧困の支援をして10年くらいだが、まだ連鎖を断ち切れたという確信があるものはない。
- ・寄付はどれくらいあるのか。
 - 年間500万円くらいだが、実際、1000万円くらいは足りていない気がしている。職員の頑張りで何とか回している。
- ・子どもの貧困は、やはり親の問題だと思うので、親支援をしようとするが、そうすると親支援したも

(提出日：2016/08/01)

のが本当に子どもに回っているのかと不安に思い、非常に矛盾を感じている。村井さんは親支援をしないというが、子ども支援する中で、実際に親支援につながるようなことはないのか。

→ 現実的につなぐこともあるが、すでに福祉事務所とつながっている親がほとんど。親の支援メニューは無く、話を聴いてあげてほぐしてあげるくらい。支援を入れても成果が出ることはそんなにならない。しかし、子どもの場合は、早く手を入れることで効果がある。むしろ、小学校に入るまでなら、貧困如何に関わらず、子育て支援という観点でしっかりと支援してあげてほしい。明石市がそういったことに力を入れていて、成果を出している。子育て世代の流入も増えているようだ。